

日刊県民福井 掲載記事 平成25年 7月25日

戦後の予防施策実る

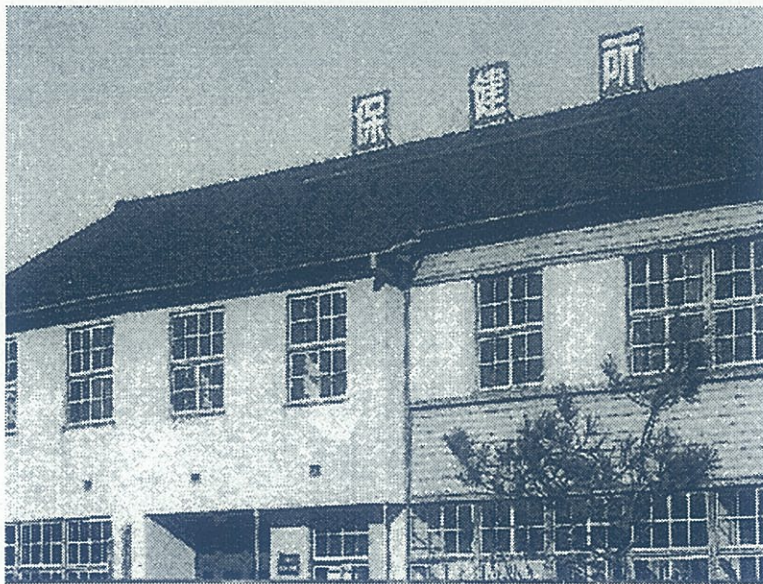
結核と聞いてもピンとこない人が多いと思います。それほどに結核は少ない病気になってきました。それでも日本では久しい間、結核は最大の感染症でした。公衆衛生の仕事に携わるようになってから、結核対策には実に長い歴史と先達の並々ならぬ努力があったことを知るようになりました。古い保健所の記念誌をひもときながら、その歩みの一端をたどってみましょう。

本県の結核患者は、明治四十二年に最高の死亡率を示し、大正後期に一時低下したものの昭和十年ごろより再び増加し、十一年には死亡率二六五(人口十萬対)に達し、その後も二十二年まで各年死亡率二〇〇台(同)を推移していました。現在では一(同)です。半世紀超で二百分の一まで改善したことになります。衛生行政史でたどると、昭和十二年に保健所法が制定され、本県では翌十三年

福井健康福祉センター医幹

宮下 裕文

いきいきライフ



昭和24年、モデル保健所として発足した福井保健所

結核対策の歩み

に最初の保健所が設置され、二十三年に結核予防を、ツベルクリン反応検査、BCG接種も行われる。重点対策として新たな策を打ち出しています。中学生を対象に五カ年継続で徹底し

た。さらに二十六年、結核予防法の全面改正が行われ、結核対策推進に向けて諸制度が導入され、結核の定期健康診断や予防接種の実施の法制化されました。結核対策の急速な進展に伴い、結核死亡率は激減の一途をたどりました。

各中学校に保健主事を置いて、生徒に適切な衛生教育を行うとともに、毎年エックス線間接撮影、精密検査、BCG接種を行い、生徒の健康管理に努めました。その数は年間四万四千一〇〇(人口十萬対)を割り、中学生への徹底指導と検診は、結核減少に大きな効果をもたらしました。結核が最大の国民病といわれた時代、撲滅に立ち向かう先達の気迫と英知が詰まった施策展開に胸が熱くなり、敬意と感謝の念が湧いてきます。

二十五年には、化学療法剤(ストレプトマイシンなど)が保険給付の対象となり、広く使用されるようになったことは、わが国の結核史上画期的なことでした。

三十八年に結核治療基準が全面的に改正され、四十年には新抗結核薬剤が採用されるなど、治療の質的側面についての充実が図られました。五十年代には、全国・本県ともに罹患率が人(人口十萬対)を割り、今では罹患率が二(人口十萬対)まで減少しています。

ただ、結核は過去の病気という意識が強くなり、今でもある病気だということも忘れられてきています。日本では激減しています

が、世界ではいまだ人々を苦しめる感染症として脅威であり続けています。今回、結核対策の歴史をたどる中で、公衆衛生を築かれた先達から「百尺竿頭進歩一(すでに努力を尽くした上に、さらに尽力する)の射るような一言を頂いた気がします。

中学生へ徹底指導、検診